

令和5年1月28日（土）、29日（日）

鎮西山城跡現地説明会資料

上峰町教育委員会

遺跡名	鎮西山城跡（別名 五万ヶ池城跡）
所在地	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本黒木
遺跡の立地	鎮西山の山頂一帯、標高202m、比高150m
調査原因	公園施設などの老朽化に伴う鎮西山再整備事業
調査面積	約6,000㎡
調査期間	○令和3年度調査 令和3年12月～令和4年3月 ○令和4年度調査 令和4年10月～令和5年2月末予定
調査主体	上峰町教育委員会

Ⅰ はじめに

町の北部にある鎮西山の山頂一帯には、以前から地表面の観察により曲輪や土塁、横堀などの痕跡が確認でき、中世の山城があることは分かっていました。ただ、鎮西山城に関する当時の記録が無いため、「いつ、誰が築城した城なのか」は分かっていません。

令和3、4年度に発掘調査を実施し、これまで謎だった鎮西山城の姿が徐々に明らかになってきました。



写真1 鎮西山城から南の佐賀平野を望む

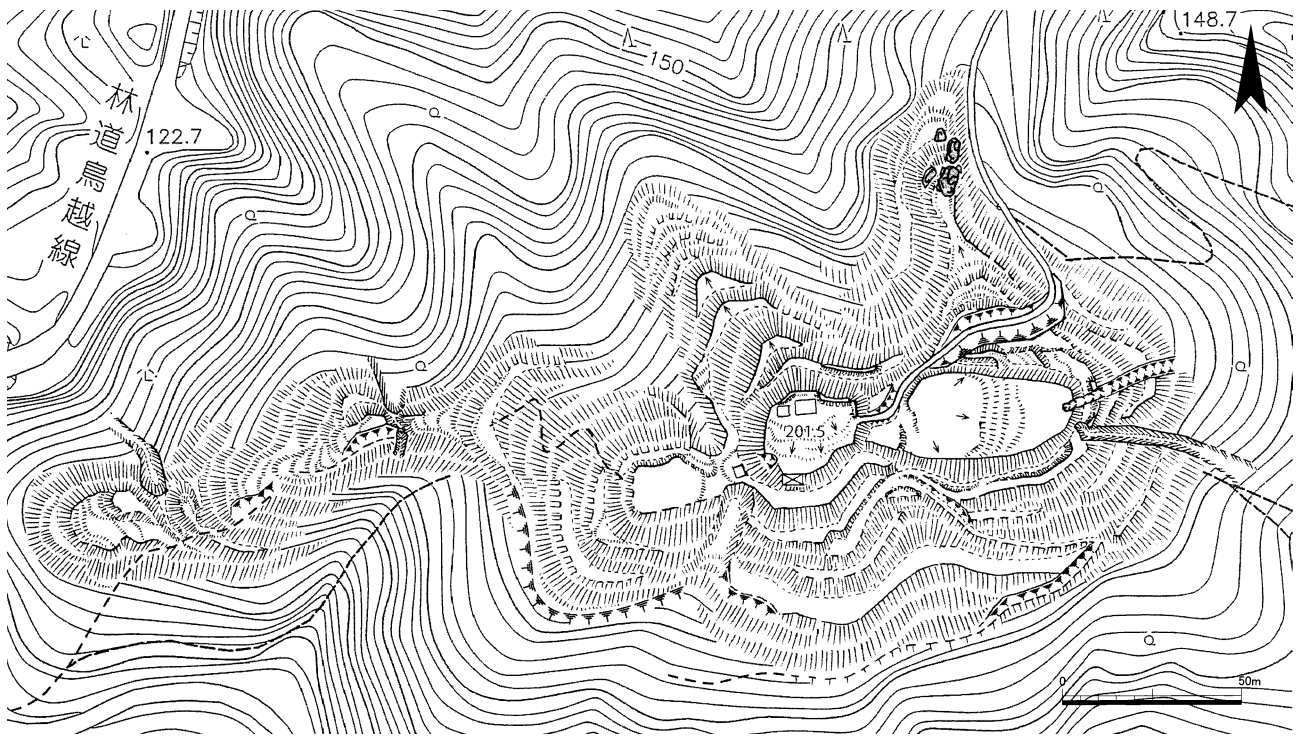


図1 鎮西山城跡の縄張図

佐賀県教育委員会「佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ 佐賀県の中近世城館 第2集」2013より使用

2 調査前の鎮西山城跡

平成15年に佐賀県教育委員会が実施した中近世城館緊急分布調査において、宮武正登氏が地表面の観察などにより、縄張図を作成しました。縄張図には、曲輪・横堀・土塁・帯曲輪・腰曲輪・堀切・竪堀などの城郭遺構が図化されています（※図1参照）。鎮西山城跡の城の範囲は、南北約120m×東西約280mとなっています。宮武氏は、現存する城郭遺構の大半が16世紀代（戦国時代）の山城に伴うものと評価しています。

3 調査に至る経緯

これまで町民の憩いの場として親しまれてきた鎮西山ですが、鎮西山全体に設置した公園設備等の老朽化に伴い、上峰町が公園の再整備を行うことになりました。

令和2年12月に山頂部の確認調査を実施しました。曲輪内の平坦な部分に試掘トレンチ6本を設定して調査を行ったところ、地表面から0.1～0.2m掘り下げた段階で、全試掘トレンチ内から柱穴や土坑、溝などの遺構を発見しました。また、12世紀後半から13世紀代前半（平安時代の終わり頃から鎌倉時代前期頃）にかけての土師器や中国産の陶磁器類などの破片が出土し、この時期にも山頂に山城以外の遺跡があったことが分りました。

このことを受けて、令和3、4年度に発掘調査を実施することになりました。

令和3年度の発掘調査では、横堀・土塁・曲輪などの城郭遺構の残存状況が非常に良好であることが分かりました。調査終了後は、調査成果をもとに城址公園の整備を行う予定です。

4 調査の成果（分かったこと）

【1】「横堀の調査」

横堀が曲輪Ⅰ（主郭）と曲輪Ⅱ（副郭）のほぼ全体を囲むように廻っていることが分かりました（※図2参照）。

横堀の規模は、城内側の塁上と城外側の堀際の水平幅4～6m、城外側の堀際の深さ0.5～1m程度です。横堀の断面形状は毛抜堀（U字形）状になっているものが多いです（※写真2、3参照）。

発掘調査では横堀や掘立柱建物跡の柱穴内などの各遺構から戦国時代と判断できる遺物は出土していないため、遺物から築城などの時期を判断出来ません。横堀が主要な曲輪全体を取り巻くように廻っている例は数少ないですが、16世紀代（戦国時代）の所産と考えられる鳥栖市の葛籠城、神埼市の横大路城などの山城で確認されています。このような状況から鎮西山城跡に現存する城郭遺構の大半が同じ時期に構築されたものと考えられます。

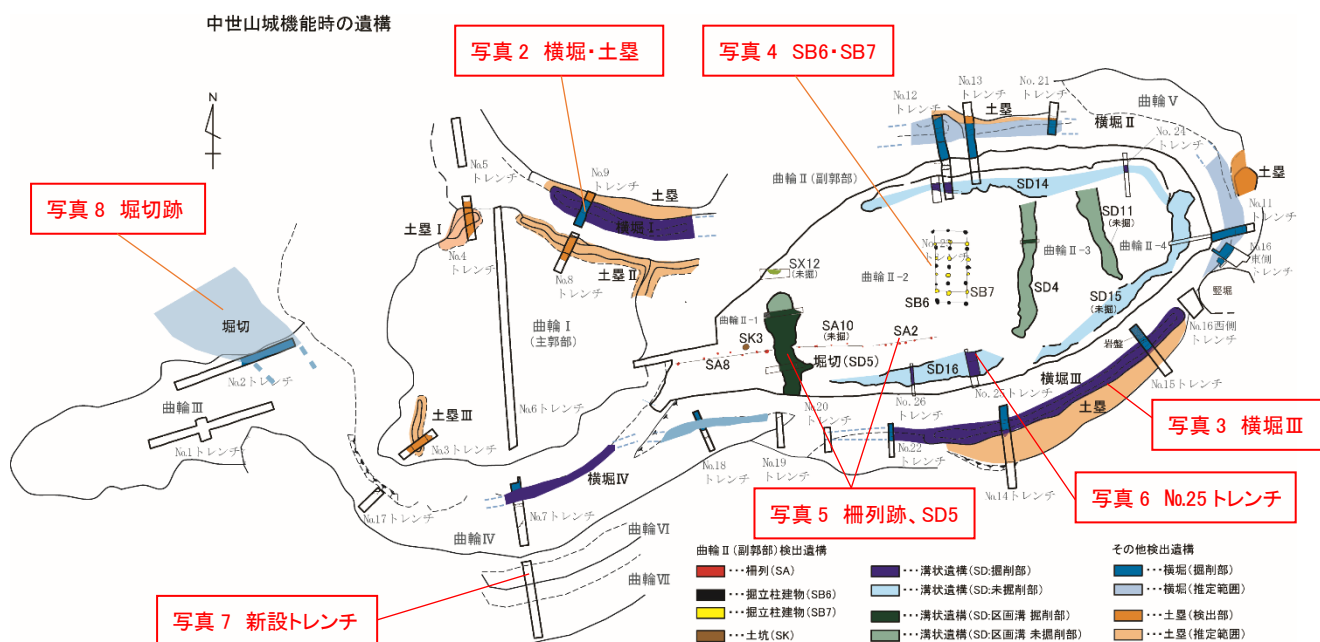


図2 遺構配置図(中世山城機能時)(1/800)



写真2 主郭北下の横堀、土塁(No.9トレンチ)
土層断面状況(南東から)



写真3 横堀Ⅲ調査状況(西から)

【2】「曲輪Ⅱ（副郭）の調査」

曲輪Ⅱ（副郭）において、溝跡が曲輪の縁辺部のやや内側を廻り、南北方向の堀切や溝などで曲輪内を区画していることが分かりました。また、掘立柱建物跡・柵列跡の構造物を発見しました（※図2参照）。

曲輪Ⅱ（副郭）は、平面楕円形を呈する南北 30m×東西 60mの大きな曲輪です。調査では、曲輪内全面の遺構検出を実施し、遺構の配置状況の把握を行いました。

戦国時代と考えられる遺構は、掘立柱建物 2 棟、柵列跡 3 条、堀切 1 条、区画に伴う南北溝 2 条、曲輪縁辺部のやや内側を廻る溝状遺構などです。

○掘立柱建物跡（SB6、SB7）（※写真4参照）

曲輪Ⅱの中央で SB6、SB7 を発見しています。SB6 は梁行 1 間×桁行 4 間で、SB7 は梁行 1 間×桁行 3 間で、西側に庇を持つ南北棟の建物です。SB6 と SB7 の建物プランが重複していることから、建て替えが行われたものと想定されます。

○柵列跡（SA2、SA8、SA10）（※写真5参照）

曲輪Ⅱ南西部で東西に並ぶように配置されており、南側から敵の進入を防ぐために設置しています。堀切跡（SD5）の東側にある SA2、SA10 は曲輪Ⅱ、西側にある SA8 は曲輪Ⅰ（主郭）に伴う施設だと考えられます。

○堀切跡（SD5）（※写真5参照）

曲輪Ⅱ西側で検出した南北方向に延びる溝状遺構で、現況で上端幅 4.2m、深度 1.1m を測り、曲輪Ⅰ（主郭）と曲輪Ⅱを分断する位置に構築されており、堀切跡であると考えられます。

○区画に伴う南北溝（SD4、SD11）

曲輪Ⅱ東側で発見した SD4、SD11 は、幅 2～3m の南北方向の溝状遺構で、両者が並行している状況から、曲輪内の区画に伴う溝であると考えられます。

○曲輪縁辺部のやや内側を廻る溝状遺構（SD14、SD15、SD16）

3 つの溝状遺構は、配置状況から一連の溝だと考えられます。溝の外周部に関しては盛土造成したような土層を確認しましたが、土塁に伴うものか曲輪に伴うものか、判断が出来ませんでした。

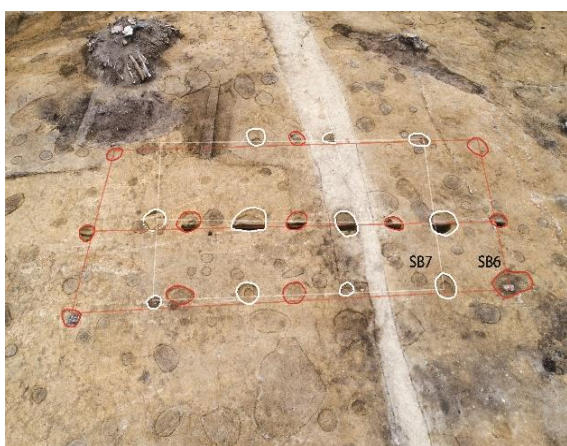


写真4 曲輪Ⅱ（副郭）掘立柱建物 SB6(赤ライン)
SB7(白ライン)調査状況(西から)



写真5 曲輪Ⅱ（副郭）堀切 SD5
柵列群(白横線)調査状況(天が南)

【3】「トレンチ調査」

各トレンチ調査において、各所で山城の築城技術に関する痕跡を確認しました（※図2参照）。

○曲輪Ⅱ（副郭）の外縁部において、平坦面を確保するために幅4～5mにわたる広大な曲輪造成を行っていることが分かりました。曲輪造成の手順としては、まず、曲輪の外縁部の地山面を階段状に切りとり、そこに山の高い部分を切り取った際に発生した排土などを盛ることで、曲輪の平坦面の拡張を行っていました（※写真6参照）。

地山を階段状に削り取るのは盛土の崩落を防ぎ安定させるためと考えられ、これは現代でも宅地造成などにも使用されている技法です。

○曲輪Ⅳ（帯曲輪）南下にある曲輪Ⅵ（帯曲輪）の造成について、山の斜面の地山面を階段状に切土して土台面を成形し、帯曲輪の縁辺部には土留めを目的として、地山掘削時に排出したと思われる花崗岩の石材が充填された盛土によって曲輪を造成した痕跡を確認しました。築城の際に技術の高い土木工事が行われていることが分かりました。（※写真7参照）。



写真6 曲輪Ⅱ（副郭、No.25トレンチ）
曲輪の拡張造成に伴う土層断面状況（南東から）



写真7 曲輪Ⅵ（帯曲輪、新設トレンチ）
石材による土留め状況（北西から）

【4】「曲輪Ⅲ（主郭西下の曲輪）の調査」

曲輪Ⅰ（主郭）と曲輪Ⅲの間において、堀切跡を確認しました（※図2参照）。

曲輪Ⅰと曲輪Ⅲの間において、大きな堀切跡を発見しました。図1の縄張図を参照すると、この堀切の北側斜面上に大きな溝状の窪みがあり、同一遺構であると考えられます。

この堀切の規模は、実効堀幅20m、実効法高は約14.5mです（※写真8、図3参照）。

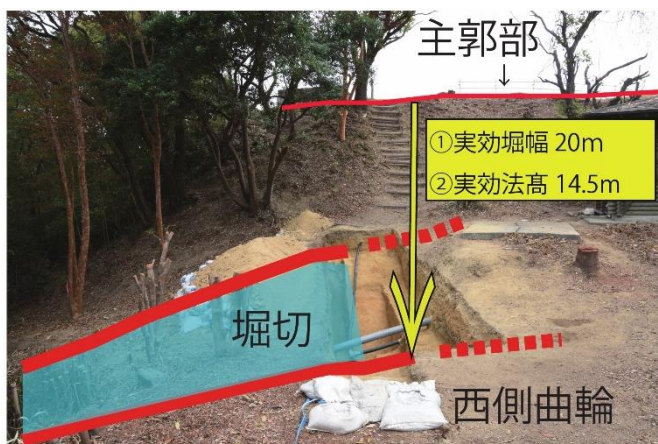
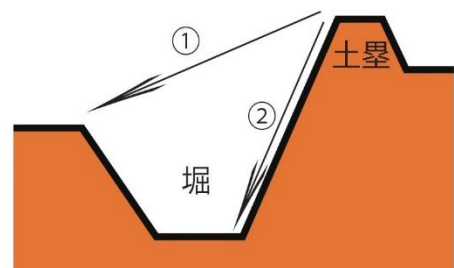


写真8 曲輪Ⅲ（主郭西下の曲輪）
掘切調査状況（西から）



①堀幅（実効堀幅）
②堀の深さ（実効法高または実効法高）
*括弧内は日本城郭史学会での名称

図3 実効堀幅・実効法高の計測箇所

【5】「戦国期山城以前の鎮西山」

平安時代の終わり頃から鎌倉時代前期頃にかけて、山頂に山岳寺院・修験道^{しゅげんどう}などに関連する施設が存在した可能性がでてきました。

令和3、4年度の発掘調査において表土中や各遺構から出土した遺物は、12世紀中頃から13世紀前半にかけての土師器・中国産陶磁器類などが主体を占めています。特に注目されるのが、宗教性のある青白磁の合子が5個体分、土師質土器の香炉など（※写真9～11参照）が出土している点です。また、同じ時期の遺構数は少ないですが、三昧場^{さんまいば}（火葬墓）と考えられる土坑（SK1は写真12参照、SK18）、土器埋設遺構（SX17）、円形建物跡（SB9、※写真13参照）などの遺構を発見しています（※図4参照）。これらの状況から、山城が築城される前に山頂に山岳寺院・修験道などに関連する施設が存在した可能性が考えられます。



写真9 青白磁の合子蓋



写真10 青白磁の合子身



写真11 土師質土器の香炉

戦国期山城以前と思われる遺構



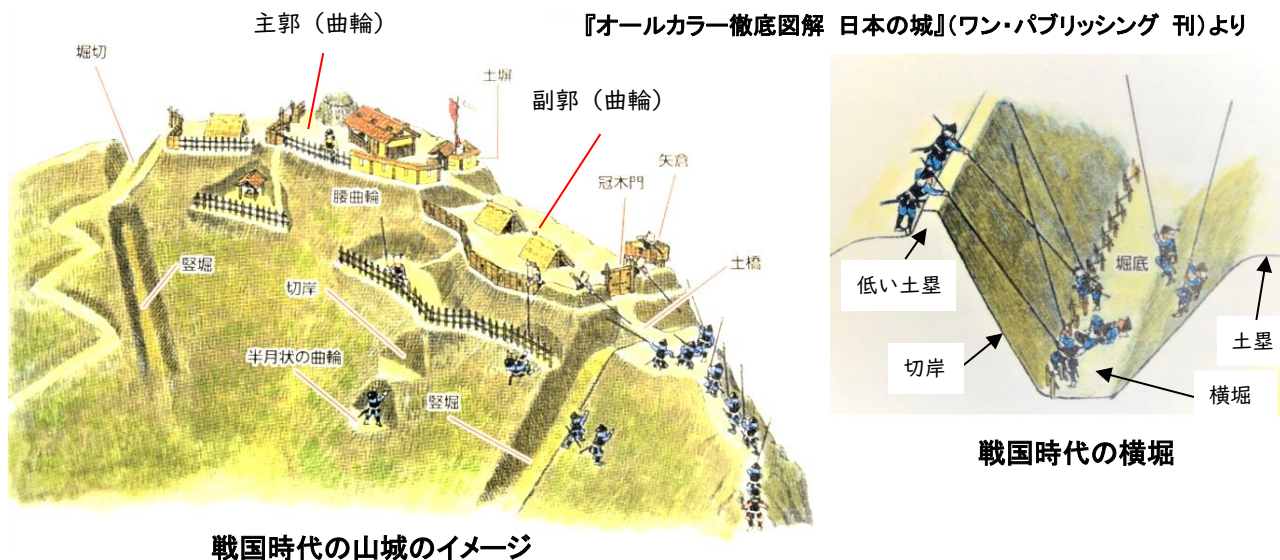
図4 遺構配置図(戦国期山城以前)(1/800)



写真12 曲輪III(主郭西下の曲輪)
土坑 SK1 調査状況(西から)



写真13 曲輪II(副郭)
円形建物跡 SB9 調査状況(南から)



○山城の各部分の名称

【曲輪（くるわ）】

山の高い部分を削ったり、削った土を盛ったりして、平らにした場所。堀や土塁で区切られています。建物が建っていた可能性の高い場所です。主郭は、城の中心部となる場所で、戦いの時にここで城主が指揮をとります。副郭は、主郭の次に重要な拠点となります。

【切岸（きりぎし）】

山の斜面を削ってつくられた人が登れないような急な斜面のことで、敵の進入を防ぎます。

【横堀（よこぼり）】

敵の進入を防ぐために曲輪に沿って長く掘った堀（溝）のことです。

【竪堀（たてぼり）】

山の斜面に縦方向に設けた空堀で、敵の左右の移動を防ぎます。

【堀切（ほりきり）】

山の尾根につくられた堀。尾根は最も山を登りやすい所なので、敵の進入を防ぐために尾根を断ち切るような形で掘った堀のことです。

【土橋（どばし）】

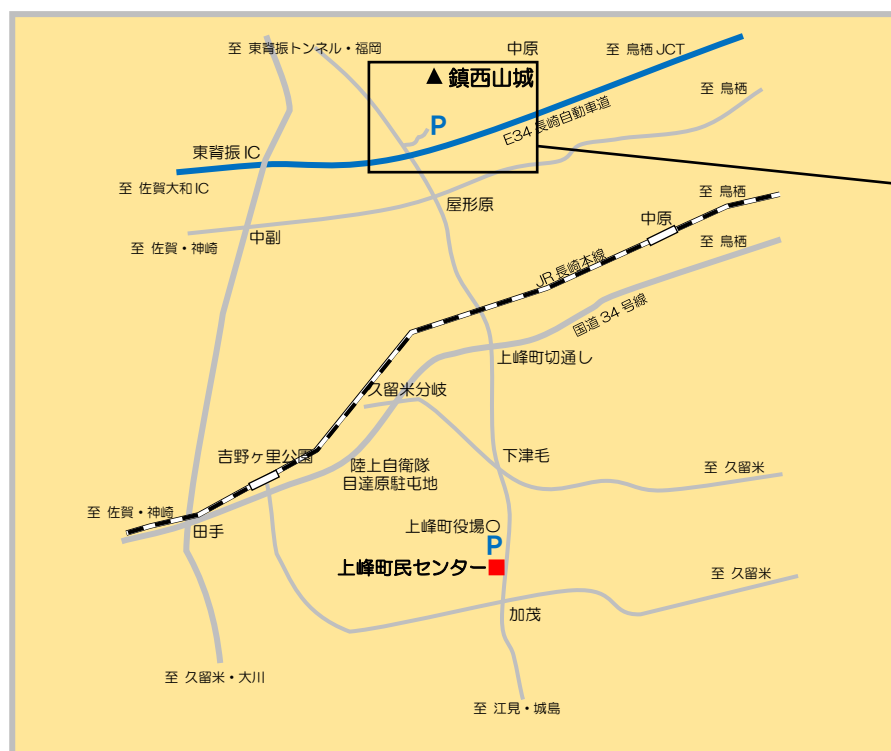
堀切を渡るために架けられた土の橋のこと。

【土塁（どるい）】

曲輪を囲むようにつくられた、守りのための土の壁のことです。堀をつくる際に掘った土を積み上げてつくります。

【虎口（こぐち）】

曲輪の出入り口のこと。城兵の出入りのために土塁や堀が途切れており、弱点を補うため、守りやすく、攻め出しやすいように工夫されました。戦国時代の終わりには、枡のような方形の空間を設けた虎口で、城内に入るには1度曲がるように設計された「枡形虎口」が登場します。



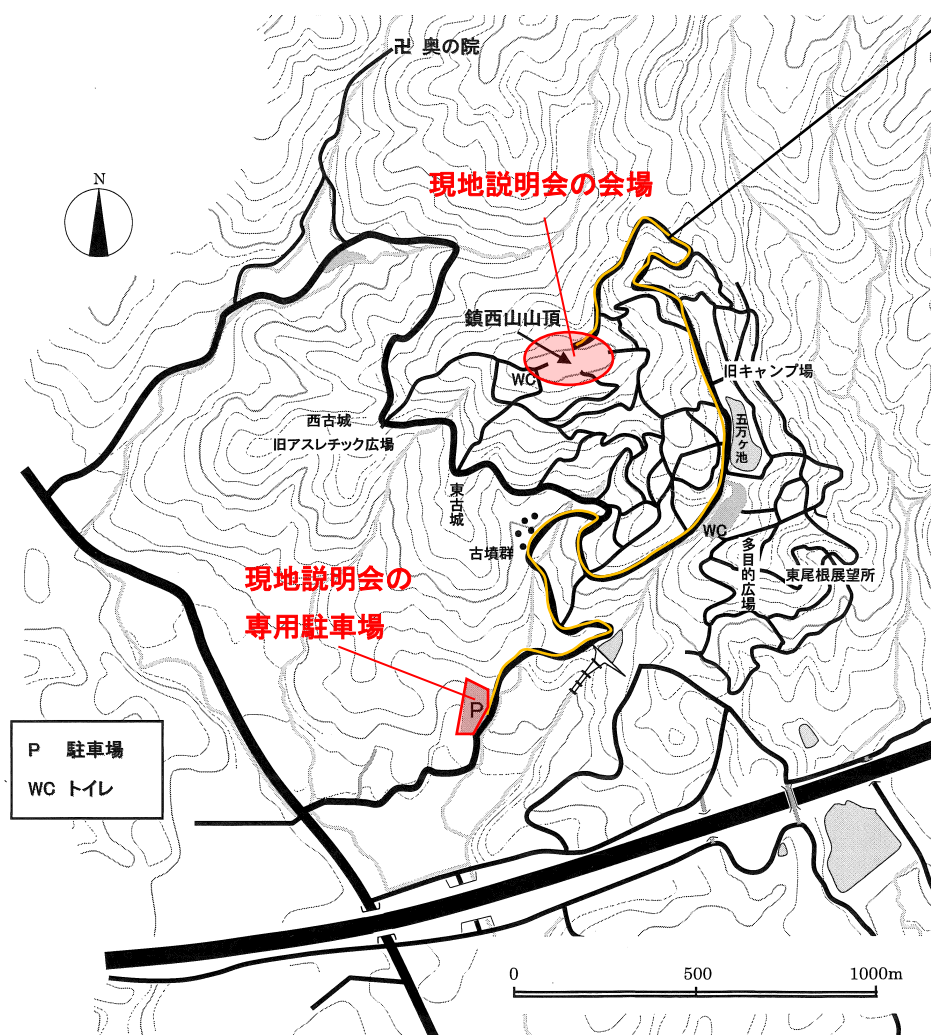
※下に詳細図があります。

上峰町民センターから
鎮西山城跡現地説明会の専
用駐車場の距離は、約 4.5km
あります。

※黄色線は、現地説明会の専
用駐車場から、山頂の会場ま
での移動ルートになります。

移動は徒歩になります。
上りで 40 分、下りで 30 分
程度です。

上峰町民センター・鎮西山城跡(現地説明会の駐車場)の位置図



鎮西山城跡の現地説明会会場・駐車場の位置図